

真栄里大綱引き大会にみる共同体の文化変容に関する一考察 Culture change of tug of war in Maezato community

1K10C021 飯塚 美雪

主査 寒川恒夫先生

副査 石井昌幸先生

【第1章】

沖縄県糸満市字真栄里において、毎年旧暦 8 月 16 日に集落の人間を東西に分けて対抗する、真栄里大綱引き大会を対象とするフィールドワークを実施した。この地域の大綱引き大会は、きわめて古い形を残して実施されていることが特徴である。しかし、近年の都市部への急激な人口流出や大会実施における財源確保の問題等により、綱引きに関する規定をゆるやかに改訂させている。その結果、大会の形が徐々に変化していると考えた。沖縄県を中心として、雌雄の大綱を引き合う行事は、農耕儀礼のひとつであったという説が有力である。しかし真栄里での聞き取り調査から、綱の意味付けとして、豊穡儀礼的側面への意識は薄まっており、より強く、より多く勝つことができる綱を追及している様子が見受けられた。このような状況で開催された大会の実態を記録し、大会保存と継承の一助とすることを本論の目的とする。

【第2章】

大綱引き大会の内容について説明し、土地の人間の説明の仕方に着目しながら、歴史的背景や綱の存在意義を考察する。役員によって毎年協議され、調整される綱引きの規定を紹介し、緩やかなルール変更が認められることを示す。また当日までの準備の内容と当日の大会の運営の流れについても説明し、その概要をまとめた。

そしてこれまで公に出されることがほとんど無かったと言える、大会準備期間中に実施される拝みの実施状況を記録した。大綱引き大会では主となる綱引き以外にも、多くの舞踊や棒術が披露される。先人たちから伝承してきた歌の内容や踊りの振付について、東村の古老の協力を得て記録した。拝みや踊りは、口承により直接的に指導されて、今日まで村に伝わってきている。しかし若年層が沖縄のことばを日常的に使用せず、拝む内容らその意味、踊りの曲の歌詞の意味や世界観は希薄になるばかりである。そのことから、今回本論でその実態を示すことができた点には、一定の価値が認められると言

ってよい。

【第3章】

大会のここ数年の傾向である、観光化と競技性の高まりに焦点を当て、分析する。真栄里大綱引き大会には、近年観光化の波が押し寄せている。行政によって民俗文化財に指定され、真栄里の綱引きは積極的な保護の対象となった。観光資源としての活用を目指しており、大会を見学で真栄里に訪れる観光客が年々増加している。その頃集落では、綱に対する村の認識が変化していた。戦後一度も勝利がなかった東村が、平成に入ってから2度軍配を上げている。儀礼的に綱引きをしているのではなく、綱引き競技として認識されている。すなわち綱を引くことの動機づけが変容していることが見受けられるのである。

また、真栄里が抱える諸問題として、経済的困難と人材不足を挙げ、その現状と解消のためになされている集落の努力について述べる。必ずこの大会を無事に開催し、継承していくことの決意を新たにする真栄里では、その創意工夫がきわめて重要であると言える。

【第4章】

大綱引き大会では、真栄里で生まれ育った人間にとって、真栄里の綱自体が、集落にとっての象徴であり綱を引くことで芽生えるアイデンティティのきっかけであると言える。古老が戦後から見守り続けている綱もあれば、若年層の積極的な参加を促す働きかけがあり、闘志を剥き出しにして引く綱もある。このように綱と各々が個々に関係性を抱いているのである。大会を安定的に実施していくために、どのように大会の運営ノウハウを伝えていくか、という問題は、真栄里にとって非常に重要である。2ヶ年のフィールドワークで東村のユタによる口承の文書化が進められたが、西村の実態把握には至らなかったため、これを今後明らかにすべき課題とする。